

閑人

原民喜

青空文庫

十二月になると小さな街も活気づいて、人の表情も忙せわしさうになった。家にゐても、街に出ても、彼は落着かなかつたが、昼過ぎになると、やはり拾銭の珈琲代を握り締めて、ぶらりと外に出た。兄貴から譲られた古トンビと、扁平になつてしまつた下駄で、三十歳の閑人の悲しさうな表情を恠へて、のこのことアスファルトの上を歩いた。しかし、もう以前のやうな無邪気な友達も見あたらなかつた。何処へ行つても友達はもう職に就いてゐたり。妻帯者であつた。彼を批難するやうな眼つきで、君も早く何とかするのだね、と励ましてくれるのではあつたが、彼も今では自分の病氣や境遇を説明するのがめんどくさくなつた。どうかすると、

まだ熱が出たりしたが、ほんとに自分が病気なのかどうか、それさへわからなくなるのもあった。退院してからもう四年にもなるのだが、それ以来は養生らしい養生も出来ず、身体に自信が持てなかったため、つい、うかうかと青春を見送ってしまったのである。さう云ふことを振返つて考へ込むと、彼は心の底から一つの細力が湧いて来て、よろめ蹣跚きさうな身体を支へて呉れさうな気がした。実際、此頃では一か八か生命を犠牲にして、何か商売を始めようと考へてもゐた。叔父が古本屋の資本を貸して呉れたら、少しは愁眉が開けさうだった。しかし返事のない叔父は当にもな
らなかつた。母や兄に心配ばかり懸けて来た身が呪はしく、一そのこと自殺した方が皆のためにもなりさうだった。

しかし彼は今も鳥屋の前に立止つて、オタケサン、オタケサンと騒ぎ廻る九官鳥を眺めて、単純にをかしさうに笑つてみた。鳥屋のむかひの昆布屋には荷馬車が留められてゐて、馬が退屈さうに横目を使つてゐる。何処へ行つても見慣れた狭い街の風景で、盛り場の方では今でもチンドン屋が騒ぎ廻つてゐた。彼は何時もの癖でT——百貨店へ入ると、三階まで登つて、屋上で猿を眺めた。猿は絶えず枝から枝へ忙しさうに飛び廻つてゐる。猿でも肺病があるのかしら——と想像してみると、何だか嘘のやうな気がした。

そのうちにいい加減草臥れたので彼は何時も行く喫茶店に入つた。するとストロブを独占しながら新聞を読んでゐる屈木の姿が

すぐ眼についた。

「ヤア。」と屈木は敏捷さうな顔を彼の方に向けながら、飲みかけの茶碗を持ち上げた。

「忙中閑ありでね。」と屈木は得意さうに笑つて、「君は相変らずだね。いや君と逢つたのはまだ一昨日ぢやないか。」と云つた拍子に少し噎れた咳をして心持顔を顰めた。屈木はチョツキから懐中時計を取出すと、

「おっと、もう二時か、ぢやまた遇はう。」と急に忙しさうに立去つてしまった。彼は屈木の姿を見送ると、何故か不思議な氣もした。あの男も以前は彼以上に病態が昂進してゐて、今にも死にさうな姿を巷に晒してゐたが、屈木は血を嗜きながらも酒を飲ん

だり女に戯れた。そして今ではともかく新聞記者をしてゐるのであつた。氣持一つで無理に無理を支へてゐる屈木の姿が、彼に何か物凄い発奮を強ひてゐるやうであつた。

コーヒーを飲み終ると、今度は人通りの少ない路を選んだ。恰度そこには小学校があつて、低い垣根越しに運動場が見えた。中央にオルガンが持出されて、円陣を作つて女の生徒がダンスをしてゐる。彼は小学生の昔がこの頃頻りに懐しく、悔恨に似た氣持をそそつた。オルガンの響に遠ざかりながら、彼は何時の間にか寺の前に来てゐた。来たついでに父の墓へまゐらうと思つて、寒々とした墓地のなかに、彼はふらふらとあゆいで行つた。

青空文庫情報

底本：「普及版 原民喜全集第一巻」芳賀書店

1966（昭和41）年2月15日初版発行

入力：蔣龍

校正：伊藤時也

2013年1月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

閑人 原民喜

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>